

吉野復興大臣の宮城県訪問ぶら下がり会見録
(平成29年8月29日(火) 17:20～17:30 於) 宮城県東松島市)

1. 発言要旨

こんにちは。最初に旧野蒜駅に参りまして、駅舎をそのまま利用した震災復興伝承館で、津波の被害状況や被害の映像等々を見てまいりました。

東松島市では1,110人が亡くなられて、そして、24名の方々がいまだ行方不明でございます。

私の福島県いわき市は34万の人口がございますけど、津波被害者が400人でございます。ここ東松島市は4万の分母で1,134名の方が亡くなられたり行方不明になったりしておりますので、本当に大変な被害を受けております。そういうものをきちんと伝えていくということでございます。

次に、あおい地区という新しい団地を見てきました。ここは本当に市民参画型のまちづくりをして、この小野会長さんという方がおられるんですけど、日本一のコミュニティ、町をつくりたいということを目指して、既に「東洋経済」の中で住みよい町日本一という、本当に短期間で日本一を獲得したということでございます。

私が感心しましたのは、一丁目、二丁目、三丁目という街区がございます。それぞれに集会所があるんですけど、普通なら同じ顔の集会所を三つ造るんですけど、ここは小野会長を始めとして、被災をされた方々が、この集会所は大きな広場を四つ、春夏秋冬、そして、大きな会議室を持ってお祭りの広場にしたい。ここは遊具を入れて子供たちの遊び場のことを重点的にしたい。ここは小さな間仕切りをして、いろんな研修施設、趣味の場にしたいと、そういうふうに機能別に分けて、一丁目の方が三丁目までも行けるし、それは被災をされた方々が市長さんをお願いをされているという、本当にすばらしいものを見させていただきました。正に市民参画型のまちづくりの理想をこの地区で見ることができました。

今は、見守り隊という形で、やっぱり一人暮らしの方々もたくさんおられますので、見守りを重点的にやっていきたい。そして、それも市の方からきちんと委託を受けて、行政の一環としてやっていくということでございます。

そして、あおい農園という形で、その見守り隊の中で農園も作って、農園というのはある意味で生きがいづくりにもなりますので、物を育てて、そして、その農産物を子供たちと一緒に食べて、その収益金は子供たちのために使うという、そういう10年、2

0年、30年後も日本一のコミュニティになっていくという、将来を見据えた今のまちづくりをやっているということを見させていただきました。

これからも大変参考になる事例でございますので、水平展開、横展開を私の方もしていきたい、このように考えています。

最後に、ここ「東松島食べる通信」という、本当にここ東松島市では当たり前前の食材が、千葉県から来た番頭である太田さんの目から見ると宝物である、これを全国に発信したいということで、年に4回、その食材を特集した、作った人の苦労話なんかも入れた雑誌をつくり、その食材を全国に展開しています。また、アンテナショップも太田さんが番頭という形で御尽力していただいて、東松島市を本当にすばらしい町にしたいという形で千葉県からここに移り住んで応援をしている、支援をしている方でございます。

こういう方がいるからこそ、復興というものがこの6年5か月の間でこんなにも早くできたんだというふうに私は思います。

私も大臣になって4か月経ちますけど、被災をされた方々と行政だけではなかなか復興のスピードは上がらないと思います。そこに、間に立ってくれる支援者、支援をしてくれる方々がいるからこそ、こんなに早い復興ができたんだと、このように4か月でございますけど、大臣としていろんなところを視察した中で、そう感じた次第であります。

また、アイザワ水産の代表である相澤さんは3代目でございます、天皇陛下にも献上する、本当においしいノリを作られております。自分のノリの話は余りしなかった。ノリを育てるためには山が大事なんだ、すばらしい山から出る水、伏流水、これが一番水産業にとっては大事なんだというお話をされました。

実は私も大臣になる前は、自民党の林政小委員長という形で、林政の責任者、実務の責任者をやらせていただいて、日本の山をどう再生していくかというのが私の取組だったんですけど、相澤さんのお話を聞いて、そのとおりということでございます。

ちなみに、私は福島県のいわき市なんですけど、「水道の蛇口をひねると森が見える」というキャッチコピーを、ポスターを作った、そういうキャッチコピーであのいわき市の水と、そして山を守っていこうというキャッチコピーがあるということも御紹介したいと思います。

(以 上)